



Title	現代日本のセクシズム・ルッキズムについての考察 : 大学におけるミスコンを起点として
Author(s)	米倉, 梨恵
Citation	平成30年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書. 2019
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71918
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

平成30年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書

ふりがな 氏名	よねくらりえ 米倉梨恵	学部 学科	文学部人文学科	学年	3年
ふりがな 共同 研究者氏名	たかだすずか 高田涼果	学部 学科	文学部人文学科	学年	3年
	たなかなお 田中菜緒		文学部人文学科		3年
	しむちやな 沈璨雅		文学部人文学科		3年
アドバイザー教員 氏名	小西真理子	所属	文学部		
研究課題名	現代日本のセクシズム・ルッキズムについての考察—大学におけるミスコンを起点として—				
研究成果の概要	研究目的、研究計画、研究方法、研究経過、研究成果等について記述すること。必要に応じて用紙を追加してもよい。(先行する研究を引用する場合は、「阪大生のためのアカデミックライティング入門」に従い、盗作剽窃にならないように引用部分を明示し文末に参考文献リストをつけること。)				
<p>0 はじめに</p> <p>研究目的、方法、および経過の概要</p> <p>本研究はミス・コンテスト（以下ミスコン）を起点にして、女性の身体や見た目の美しさに対する規範、その背景にあるセクシズム・ルッキズムを含む差別的構造を分析する。それを通じて、この構造の問題点およびそこに取り込まれる女性の困難な状況を明らかにすることがひとつの目的である。それと同時に、その構造の内部で主体性を獲得しようとする女性の在り方について再考することも目的とする。そのために、第一に、日本におけるミスコンがどのようにして表れてきたのかを概観する。またミスコンはフェミニズムの立場から、女性の価値を美しさに還元しているという性差別的な面、さらに人間を一面的な「美しさ」で格付けするという人権侵害としての面がある、等の問題点が指摘されてきた。そこで本研究ではさらに大学におけるミスコンに着目してその問題構造を明らかにするため、第二に、環境型セクシュアル・ハラスメントとしてミスコンを捉える考察を行う。しかし、このような議論には、男性を対象とした「ミスターコンテスト」（以下ミスターコン）を行えばよいのではないかというミスコン擁護や、出場者の外見だけでなく内面も考慮したイベントを行えば良いのではないかという反論が予測される。そこで第三にミスターコンとミスコンの非対称性および、ミスターコンを開催することはミスコンを肯定することにつながるのかという問題の検討を行う。さらに第四に投票者と候補者の関係を起点にミスコンの問題点を考察する。最後に、この構造に取り込まれながらも、従来のジェンダー規範にただ則るのは別の可能性を追求している女性にも着目するために、ミスコンにおける候補者と投票者のコミュニケーション</p>					

ンとミスコンに出場する女性の主体性の再考を行う。これらを遂行するために本研究は文献研究およびインタビュー調査を行った。以下、具体的な研究成果を示す。

1 研究成果

1-1 ミスコンの歴史とフェミニズム

まず、現在のようなかたちのミス・コンテスト(以下ミスコン)が日本でどのようにしてあらわれてきたのかを概観する。¹第二次世界大戦後、日本では会場に観客を集めておこなう大規模なミスコンが開催されるようになった。1950年には読売新聞社主催で「ミス日本」コンテストが開催され、現在も続いている。同時期には世界大会への出場が前提となるミスコンの「ミス・ユニバース」や、地方での小規模なミスコンが開催されるようになった。国内におけるミスコンの流行や女子の大学進学者の増加という背景もあり、1970年代には大学内でミスコンが開催されるようになった。たとえば1974年には慶應義塾大学企画事業倶楽部が「ミス・ユニバーシティ」コンテストを開催している。

ミスコンについてフェミニズムはどのように考えてきたのだろうか。フェミニズムはこれまでミスコンに対して、女性を「美」という基準、とりわけ容姿の美しさによって序列化する女性差別的な催しであるとして批判を行ってきた。また、容姿以外にも年齢・人種・障害の有無・配偶者の有無など、ミスコンには一定の基準を満たす女性のみが「美しい」とされる前提があるとされ、フェミニズムは女性の画一的な「美しさ」しか認めない男性中心主義的規範に批判を加えてきた。

1-2 大学におけるミスコンと環境型セクシュアル・ハラスメントについての検討

ここでは特に「大学において」開催されるミスコンの問題点について考察する。大阪大学でも2002年から2016年まで阪大の中の女性学生を対象としたミスコンが開催されていたが²、学生による反対運動があったこと、また大学側から「ミスコンは環境型セクシュアル・ハラスメント(以下環境型セクハラ)にあたる」との見解が出たことを受けて、現在は行われていない。以下、阪大におけるミスコン反対運動に関わっておられたAさんへのインタビューおよび「環境型セクハラ」という概念を軸に、大学という場において行われるミスコンを批判的に検討していく。

本来あらゆる属性を持つ人が対等に学問することが理想とされるはずの大学内で、特に女性を、容姿によって序列化する催しを行うことに正当性があるのだろうか。この点について、「環境型セクハラ」という概念を用いることによって、批判的に検討するのが本章の主な目的である。マッキノンの議論によれば、セクハラとは「最も広く定義するならば、不平等な権力関係を背景として相手の希望に反する性的要求を押しつけること」³であり、「対価型」と「環境型」の2つに類型化で

¹ 鳥越成代編『女性と美の比較文化』勁草書房、2008年 p.126

² 朝日新聞 2016年10月7日付け朝刊

³ キャサリン・A・マッキノン著、村山淳彦監訳『セクシャル・ハラスメント・オブ・ワーキング・ウイ

きる。日本で編纂された、大学におけるセクハラへの対応について書かれた書籍では「性的な言動、性的な図画や文書等の掲示または提示により、安全で公平な研究教育環境または職務環境を阻害したり、研究教育場または職務上屈辱感や不快感あるいは不安感を抱かせるような環境を醸成すること。また、その結果、教職員や学生の人格や個人の尊厳を傷つけること。」が、大学における環境型セクハラの典型として説明されている。

上に引用したような行為がセクハラであることには多くの人が同意するであろうし、またセクハラおよびハラスメント一般が許されるものではないという認識も周知のものになってきた。そこで本稿で問題になるのは、「ミスコンは環境型ハラスメントということができるのか」という点である。

ミスコンの宣伝文や、出場者の紹介写真を、セクシャルなものと捉える人はそれほどいないかもしれない。しかし女性にばかり、「見られる対象」としての美しさが求められてきたという現実に鑑みると、「〇〇大学でいちばん美しい/魅力的な女性学生を決める」と銘打ち、ミスコンを企画、宣伝、実施し、出場者たちの写真を公開しステージで観客の前に立たせることは、ジェンダー規範を再生産することに繋がるのではないだろうか。露骨に卑猥な文章や写真がいくら排除されていたとしても、ひとつの性についてそのような規範を再生産することに加担するミスコンは、十分に「性的な」要素を含んだものとして捉えられるのではないか。そして、「〇〇大学でいちばん美しい/魅力的な女性学生を決める」というミス・コンテストを大学や教員側が奨励、容認、あるいは黙認するとき、そこには「女性学生の価値を外見の美しさ、魅力に還元するという価値観を大学は肯定する」というメッセージを発することになるのではないか。これは、「安全で公平な研究教育環境または職務環境を阻害したり、研究教育場または職務上屈辱感や不快感あるいは不安感を抱かせるような環境を醸成すること」⁴につながりうると私は考える。本来は女性学生にとっても、それ以外の構成員にとっても、研究・教育を行うためにあるはずの大学において、女性というジェンダーをもつ人間の価値を美しさに還元するメッセージを放つことは、大学という場の理念そのものに反すると考える。環境型セクハラという観点を導入したとき、「私は美しさによって評価などされたくない」という女性学生をも含み、女性というジェンダーをもつ人々を巻き込んで序列化するミスコンは、たんに「学生が主体的に行なっている、楽しみのための行事」で終わる問題ではなくなる。

以上のことから、大学におけるミスコンは、大学に在籍する女性学生に、そのジェンダーゆえに一方的な規範を押し付け、公平な研究環境を阻害する影響を持つ環境型セクハラに当たると結論づけ

メン』こうち書房, 1999年 p.26

⁴ 『キャンパス・セクシュアル・ハラスメント対応ガイド 改訂増補版』沼崎一郎 嵯峨野書院 2005年

ることができる。

1-3 ミスターコンはミスコンがもつ問題を解決できるか

ミスコンの持つ問題性（“女性へ”向けられる画一的な“美しさ”への強制）を解決するために、男女の平等という視点でミスターコンが取り入れられることがある。ここでの問題点を大きく二つに分けて述べる。

まず、一つ目の問題点としてミスコンとミスターコンとの非対称性について考察する。女性へ向けられる“美しさ”への強迫観念は長い歴史の中で今も続いている。女性の多くが職場で働き出す以前は「“美”の報酬が支払われる」職（女優・ダンサー・高給セックスワーカーなど）に就く女性と、家庭で家事労働をする女性に明確に分かれていたとナオミ・ウルフは言う。⁵フェミニズム運動の高まりにより多くの女性が男性と同じ職場で働き出すと、これまではそのようなことがなかった女性も“美しく”あることが求められ、それが繰り返されるうちにその職を遂行するのに“美しさ”が必要なものであるという書き換えが為される。そのような、女性が社会で置かれている立場を踏襲、強化しジェンダー規範を再生産するという役割も持つ「ミスコン」と、社会において女性のような立場になく、「ミスターコンテスト」という画一化された“美”によって序列化される場がその場限りの“特別な場”である「ミスターコンテスト」は特に、女性、男性にとっての意味という点で大きく異なり、この二つを対称なものであるとは言えない。それどころか、両者を対等なものとして並べようとする行為は、（主に男性によって定められた基準によって）“美しさ”を求められ強制させられる女性、引いてはジェンダー規範に苦しめられる女性としての当事者性をも曖昧なものにする危険性があるのではないだろうか。

二つ目の問題として、ミスターコンの開催はミスコンがはらむ問題を解決するものになりえるのかという点について考察する。ポーヴォワールの有名なテーゼ「人は女に生まれるのではない、女になるのだ」も述べているように女性というときにあげられる特質というものは最初から持っているものではなく社会構造から課せられていくものであると考えられる。これは特に“美しさ”に関して考えてみると時代や地域によって「女性の“美しさ”」に求められていることは違っても女性はみなそのような“美しさ”に近づくように求められていることから分かる。このような問題を解決するには、女性が受ける被害を単に「個々人のこと」と切り捨てるのではなく、性別による支配・被支配の構造から変えていくべきであろう。その点でミスターコンは、「「ミス・コンテスト」によって女性が“美しさ”に近づかなければならないというジェンダー規範が再生産される」という前提を肯定してはじめて催されるものであり、この前提を批判することが無い以上ジェンダー規範の再生産は免れないものである。

⁵ ナオミ・ウルフ著、曾田和子訳、『女たちの見えない敵—美の陰謀』TBSブリタニカ、1994年 p39

以上の二つの点からミスターコンはミスコンの持つ問題性を解決するとは言えないであろう。

1-4 ミスコンにおける候補者と投票者の関係について

また、ミスコンを主催する側が「ミスコンは外見を根拠に女性を序列化している」という批判に対し、ミスコンを肯定する要素として審査基準を「外見のみではない」とする場合がある。このような応答や反応に対し「外見のみ」の審査基準ではないミスコンは本当に問題を孕んでいないのかについて、候補者-投票者の関係性に着目して考察していく。ミスコンにおける女性(ここでは候補者)の序列化という場を提供しているのは主催団体や協賛企業(や背景に存在する支配的規範)だが、実際に候補者の序列を決定するのは投票者による投票である。投票という場において候補者は、どのような性質を持つ投票者から、どのような部分が評価されたと感じているのかを分析することでミスコンが候補者に与える肯定的な影響について論じるとともに、それでもなお候補者を縛る性差別的な規範の存在について言及することで、ミスコンが単なる外見差別を超えた問題を孕む可能性を指摘する。

女性に対する視線を考察する手がかりとして、フェミニスト映画理論を援用する。⁶齊藤綾子は、フェミニストによるハリウッド映画批評の中で映画は「女らしさ」「ファム・ファタール」などの社会的・文化的イデオロギーを娯楽というオブラートに包みながら体制保持に加担する装置であるとして批判されてきたと述べる。さらに齊藤は、ローラ・マルヴィ『視線的快楽と物語映画』に触れながら、映画という形式の中の表象はジェンダー性を持ち、映画という形式自体が見る(男性)観客-見られる女優という力関係を持っていると指摘している。この理論に対しては、女性観客の存在や女性の能動性を度外視しているという批判がなされるが、男性中心的な規範の中で女性が対象化されてきた事実を表す有効な理論と言えるだろう。

では、ミスコンの候補者は投票者との間の「視線の力学」を実際にどのように捉え、経験しているのだろうか。本稿では、大阪大学ミス阪大コンテストの候補者だった B さんへのインタビューをもとに、候補者における「視線」の経験を分析する。B さんは、「顔の見えない」(=匿名)投票者に対して、やり取りに対して苦痛や嫌悪感を抱いていたが、その人の人となりを知ればもっとコミュニケーションをうまく取れたのではないかと振り返っている。元々親密ではない投票者に対して、「顔の見えない」状態から「人間的なコミュニケーション」の状態に移行すればもっと自分も楽しくコミュニケーションができたのではないかと考えている点で、B さんはお互い顔の見える相

⁶ ここでは齊藤綾子「フェミニズム映画批評の変遷と実践」・「フェミニズム映画批評の変遷と実践」(竹村和子・義江明子編『ジェンダー史叢書 第3巻 思想と文化, 明石書店, 2010年) 加野彩子「サロメが見せるもの: 日本近代演劇における視覚性とジェンダー」(天野正子ほか編集委員, 斎藤美奈子編集協力, 井上輝子解説『新編 日本のフェミニズム 第7巻 表現とメディア』岩波書店, 2009年)を参考にしている。

互的なコミュニケーションを望んでいると言える。SNS では、候補者のみが顔を公開し、コメントする側は匿名であるという非対称な状況が成立している。これはフェミニスト映画理論で述べられていた「窃視」の状態に近いものである。しかし「顔」という点で非対称であっても、言葉を交わすことで相互的な関係を築けるのではないかという B さんの考えは、単に投票者を見る主体/能動・候補者(自分)を見られる対象/受動とみなす図式とは異なり、むしろその図式から抜け出す可能性の提示ではないだろうか。

また、B さんは元々の知り合いである投票者に対しては自分のがんばりを「見ていてくれていい」ことにありがたさを感じ、期待をかけてくれているのだから応えなければならない、と感じていることがわかる。つまり、一口に投票者と言っても候補者自身との親密度(や性別)はさまざまであり、候補者の感情も変わってくると言うことができる。「見ていてくれる」から「応えたい、責任を感じる」という考えは、「顔のない」投票者の場合に感じられるのかといった検討は必要だが、投票者が単に候補者を美的に消費しているという構図だけではなく、候補者の内面や頑張り・情熱といった面に対する「応援」という行為とそれに対する積極的返答という新しい構図を見出すことができる。

しかし、ミスコンという場において候補者と投票者は対等に交流を行うことができるかと問われれば、それは難しいだろう。異性愛規範が前提となった「告白タイム」やウエディングドレスは、観客のジェンダー・立場その他の多様性を想定していないばかりか、候補者を一対多の関係性の中で「見られる」だけの存在にしてしまう。また、候補者自身にもミスコンに出ること＝美醜で判断されるのを覚悟しなければいけないこと だとの自覚を迫っている以上、ミスコンはいくら内面を重視しようとも、美人コンテストとしての側面は否めないものになっている。これはミスコンが「美しいものの中から代表を決める」というコンテスト形式を持つ以上避けられない事態であり、候補者-投票者間の関係も非対称的になってしまう。SNS において不快なコメントを無視すればイメージが悪くなる、といった語りからも、外見に関係ない部分であっても候補者の行動は無言の圧力に晒されていると言うことができるだろう。圧力は多数者＝投票者の利になるように働くため、候補者の行動にはある程度支配的規範に規定されてしまう。

候補者は、以上のような抑圧もすべて了解し、受け入れるつもりでミスコンに臨むという点は非常に重要である。候補者は単に見られる対象でも、男性の欲望の視線を内面化しているわけでもなく、美醜による判断を自分の評価とは切り離して考え、投票者と「視線の力関係」ではなく、応援に対する返答といった相互的な関係を築く可能性を考えているのではないだろうか。しかし、ミスコン、ひいては現状の社会はまだ、一步道を踏み外せば男性中心的な視線によって女性が対象化される危険に満ちている。よってミスコンは、女性が自己実現をめざす場としては未だ不十分な点が多いと考えられる。

1-5 ミスコンに出場する女性の主体性についての再検討

ここまで大学におけるミスコンが持つ問題点や、それらの解決策として提示されてきたミスコンの開催の問題点、候補者と投票者の関係からミスコンの自己実現の場としての不安定さについて述べてきた。ここで「ミスコンに出場する」といった女性の選択の根拠はその女性がおかれている状況や構造のみに求められるのかを考察したい。社会学者の牟田和恵は「キレイになりたい」と考える女性について、男性中心主義的な社会構造による抑圧を受けながらも、同時にその構造を理解して生き残ろうとする意思をもつ二面的な存在であると主張する。⁷

ミスコンに出場する女性はその男性中心主義的な視線にもとづく構造に絡め取られている側面もあるといえるが、同時にそれぞれの文脈と意思を持っている。ここでミスコンに出場する個人の文脈に着目するために、私達は大阪大学でおこなわれたミスコンに出場経験のある女性にインタビューをおこなった。ミスコンを主催する団体に出場を打診された B さんは「この広い阪大のなかで声をかけてもらって、新しいことができるならそれはそれでチャンスだと思って」と考え出場を決めたという。B さんのこの意見は男性中心主義的な構造にすべて回収されるものかといえるのだろうか。

ミスコンの根底にある女性に課せられる美の規範や男性中心主義的な構造を批判しながら、ミスコンに出場する女性の選択も存在しないものとしてみなさない視点を持つこともできるのではないだろうか。ミスコンにおける男性中心主義的な視線にさらされている女性は正しい選択をすることができない、あるいはその選択の根拠は構造のみに起因すると想定するのは女性の主体性や意思をみとめないことにつながる。女性の生き方の選択と構造の関係について要由紀子はセックスワーカーたちが自分の生き方を選択する際に、その生き方と彼らが生きる社会の構造への批判を分けている。⁸社会構造はそれぞれ資本主義やセクシズム、性などが複雑に絡み合っていて分ちがたいものであるが、その構造を批判し改善しながらも、女性・セックスワーカーの選択を取りこぼさないことはできるはずであると主張する。このことをミスコンの文脈に応用すれば、ミスコンに通底する男性中心主義的な構造を批判しながら、女性の選択もそこにあるのだとみとめることは検討の余地があるのではないだろうか。

2 まとめ、研究を通して

以上の研究を通じ、日本でミスコンがどのように表れて、ミスコンに対してフェミニズムがどのような問題点を指摘してきたのかを概観した。特に大学におけるミスコンテストは環境型セクハラと認められる。また、ミスコンを肯定するためにミスコンを開催すればよいという反論が考え

⁷ 牟田和恵、『実践するフェミニズム』岩波書店, 2001年 p.197

⁸ 要友紀子, 「誰が問いを立てるのか——セックスワーク問題のリテラシー」 p.44 (SWASH 編, 『セックスワーク・スタディーズ——当事者視点で考える性と労働』日本評論社, 2018年)

られるがミスターコンとミスコンには非対称性がみとめられ、ミスターコンを開催しても美しさの規範は再生産されてしまうため、ミスターコン開催はミスコンのもつ問題を解決する方法にはならない。フェミニズム映画理論から、投票者一候補者の関係は見る/見られるという関係だと考えられるが、言葉をかわすことで相互的なコミュニケーションを実現する可能性を見いだせた。しかしその一方でそこには男性中心主義的な視線によって女性を対象化される危険があることを忘れてはならない。このような状況のなかでミスコンに出場する女性の選択はすべて構造に回収されてしまうと断言することは、女性の主体性をみとめないパターンリスティックなものである。構造を批判しながら女性の選択がそこにあることをみとめることは可能である。

ミスコンの構造を批判する際に美しさを能力とみなす一種の能力主義を見出し、それを批判すること、序列化を差別と考えるにはまだ考察が不十分である。また、インタビューを通して社会構造と個人のかかわりについては慎重に検討する必要性を感じた。構造とのかかわりを無視して個人を単純に批判することには慎重になる必要があるだろう。

参考文献

朝日新聞 2016年10月7日付け朝刊

キャサリン・A・マッキノン著, 村山淳彦監訳. 『セクシャル・ハラスメント・オブ・ワーキング・ウイメン』 こうち書房, 1999年

江原由美子. 『ラディカル・フェミニズム再興』 勁草書房, 1991年

要友紀子. 「誰が問いを立てるのか——セックスワーク問題のリテラシー」 (SWASH 編. 『セックスワーク・スタディーズ——当事者視点で考える性と労働』 日本評論社, 2018年)

牟田和恵. 『実践するフェミニズム』 岩波書店, 2001年

ナオミ・ウルフ著, 曾田和子訳. 『女たちの見えない敵——美の陰謀』 TBS ブリタニカ, 1994年

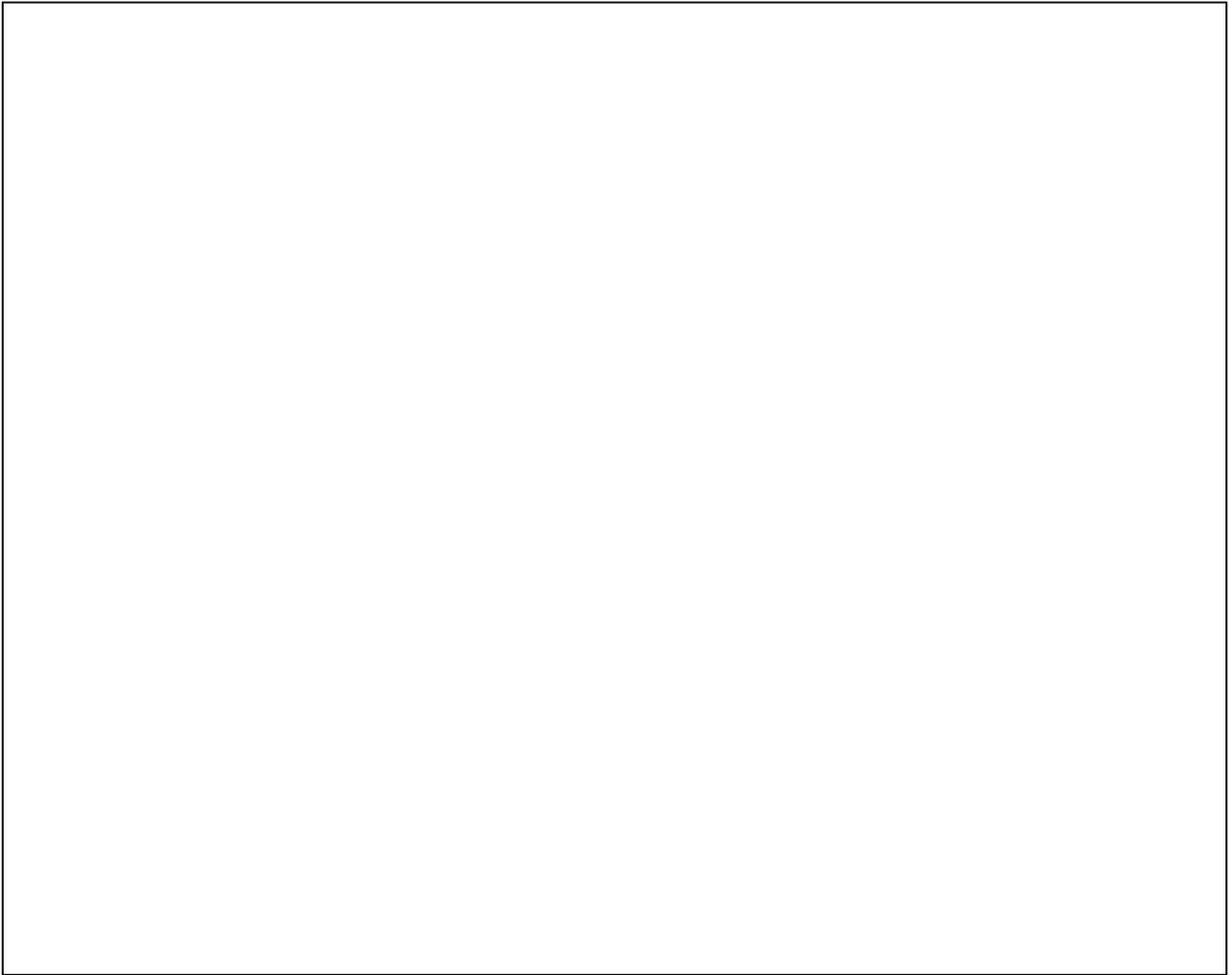
西倉実季. 「ミス・コンテスト批判運動の再検討」 (日本女性学研究会「女性学年報」編集委員会「女性学年報」24号, 2003年, 21-40)

沼崎一郎. 『キャンパス・セクシュアル・ハラスメント対応ガイド——改訂増補版』 嵯峨野書院, 2005年

斉藤綾子. 「フェミニズム映画批評の変遷と実践」・「フェミニズム映画批評の変遷と実践」 (竹村和子・義江明子編『ジェンダー史叢書 第3巻 思想と文化, 明石書店, 2010年)

鳥越成代編. 『女性と美の比較文化』 勁草書房, 2008年

吉澤夏子. 『女であることの希望——ラディカル・フェミニズムの向こう側』 勁草書房, 1997年

A large, empty rectangular box with a thin black border, occupying the majority of the page. It is positioned below the header information and is likely intended for a drawing or diagram related to the application.